

道徳教育考

— ペスタロッチの道徳教育論を手がかりに —

杉山 直子*・杉山 緑

A Study on Moral Education

SUGIYAMA Naoko, SUGIYAMA Ryoku

(Received July 20, 2007)

キーワード：道徳教育、ペスタロッチ、居間の教育学

はじめに

この50年で日本の産業形態や社会は大きく変わった。それにともない子どもたちの生活も大きく変わった。そして子どもたちの数は少なくなってきた。しかし、本田和子の指摘によれば、かれらを取り巻く状況はますます「過剰」なものになってきている。⁽¹⁾ 子どもは、家庭・学校はもちろん社会・経済でもますます中心にとらえられてきている。子ども衣食住の生活に関係する物や学習に関する事が商業のなかで大きな位置を占め、テレビ、音楽、アニメ、ゲームなどの娯楽関連も子ども中心、或いは子どもと大人共通のものが増加し続けている。今や子どもが消費者としてターゲットになってきており、子どもにとっても生活に関わることと娯楽に関わることの重要さの比重が逆転してきている。お金があれば、生活労働や楽しみは買うことができる。

そのような中で、学校の一つの役割である社会と子どもをつなぐことは非常に難しくなってきた。他方、家庭にあっても子どもたちは、家庭生活にかかわる役割は少なくなり、多くの子どもは、自分の部屋を持ち、そこは冷暖房完備であり、テレビやゲームや様々の本があり、多くの物に囲まれて暮らしている。家庭のホテル化という言葉に象徴されるように、家族が共に集まり食事をし話をする回数も減少し、孤食の問題も生じている。食べたい時に好きなことをしながら自分の部屋で食べる。⁽²⁾ 家事に代表される家庭生活に関することはほとんどしない、という事態が生じているのである。

まるで学校の語源（閑暇）ができた時代の上流階級子弟の暮らし—自分の生活のために自分の時間の大半を費やすことはなく、その時間を娯楽や学校に使う—を日本の多くの子どもたちががしている。いやそれ以上の快適で便利な暮らしであろう。こうしたことは、科学技術の進歩やそれにとまなう生活様式の変化など、歴史の中での様々な取り組みの結果実現した素晴らしい現状ともいえるかもしれない。社会の変化に適応させるのみの子ども観や教育観をもち、それに家庭・学校の在り方を合わせれば何も問題意識は生じないのか

*梅光学院大学

もしれない。しかし、現在の日本の子どもたちがけっして幸福ではない姿もみえる。⁽³⁾

ペスタロッチは、著書『隠者の夕暮れ』の中で次のように叫んでいる。「人間よ、あなた方は見ないのか、大地の子らよ、あなた方は感じないのか、あなた方の上にある上流階級の人たちが、その教育によって、すっかりその内なる諸能力を失ってしまっていることを、人類よ、あなたは見ないのか。彼らが自然の賢明な秩序からそれていることが、彼ら自身に空しく、荒廃した不幸をもたらし、またひいてはそれを下々の人民にまでおよぼしているということ。大地よ、あなたは感じないのか。人類が家族の中での純なるしあわせからそれて、いたるところで、自分の博識をひけらかし、自分の名誉心をくすぐってもらいたいばかりに、狂騒けんらんたる檜舞台上の人になろうとして、ひしめき合っているのを。迷える人類が、遠く遠くさすらい去ってゆく！」⁽⁴⁾

実生活から離れた多くの知識を学び、内的諸能力を失い、自然の秩序からそれ、空しく不幸であるという子どもたちへの対応が日本では緊急の課題になってきている。

本論文では、本来的な意味での「人間としての生き方、在り方」⁽⁵⁾をめざす道徳性の発達を促す教育の在り方について、時代・産業・労働の変化の中で、そこで生きていくために必要な力の獲得と人間としての生き方在り方を追究しつづけたペスタロッチの前期的道徳教育思想を手がかりに検討する。

1. 問題の所在

大人のモラルの低下や子どもが見せる種々の問題に対して、親・家庭での育てられ方に原因があるととりあげられることが多い。生まれて間もなくから、水泳教室などの身体における早期教育、学習塾など知（頭）に偏った早期教育、またテレビなどのメディアからの情報など、子どもの日常的を超えた、自然にある身の回りの環境を飛び越えた学習が子どもたちを取り巻いている。一部の子どもたちには、将来仕事につくための学習が生まれてすぐに始まっている場合（いわゆる「超早期教育」）もある。なかには自分自身の子ども時代の体験から、それが当たり前と思っている親もいる。また、親子の関係が、子どもの自我が始まった思春期から崩壊していく姿も事件として取り上げられるようになった。

公共の場では、マナーの問題がよく問われる。学校においても、マナーの問題は悩みの種である。自分自身の生活を管理できない若者の姿や、生活リズムや食事などの健康管理や金銭管理、自己中心的で他者とのかかわり方を知らない、わからない、わかろうとしない、立ち入らない若者の姿など、自分自身や他者・集団・社会と自分などのかかわり方を抱えている。自分自身の判断力、自分の生き方に関して、流行や他者に振り回される。

道徳教育における課題は道徳性の発達をいかにひきおこし、内面性を育てるのかということである。

その中で必要なことは、一人の人間の誕生から生涯の幕まで、各々の幸福のために人間としての「自然」をいかに考えるかということである。たとえば、子どもが生まれた最初の環境である家庭では何をこそ必要とするのかである。ただし、それは個々の親・家庭のみの問題ではなく歴史的社会的にとらえていかねばならない。また家庭外の子どもを取り巻く環境としての大人、学校、地域の在り方や働きかけ方の再考の必要性もあろう。さらに、家庭もその他の社会も産業やそれに伴う労働形態や生活様式も、現在急激な変化の中にある。変化するものの中にあって、変わらない人間の育ちについて問い直し、より良い

ものにしていくことを現在ほど求められている時代はないであろう。

2. 日本の学校教育における道德教育の目標

そのようななか、日本の学校では道德教育をいかに考えているであろうか。生涯学習社会の中での学校教育の位置づけも考慮した場合、キーワードは「生きる力」である。そして学校教育は、「生きる力」を子どもに獲得させるため、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな身体」をその構成要素として考える中、道德教育の位置づけは「豊かな心」とされている。

『学習指導要領』を例にとると、その目標、内容については以下のようになっている。

①『高等学校学習指導要領』（平成11年版）⁽⁶⁾

第1章 総則 第1款 教育課程編成の一般方針

「2 学校における道德教育は、生徒が自己探求と自己実現に努め国家・社会の一員としての自覚に基づき行為しうる発達段階にあることを考慮し人間としての在り方生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行うことにより、その充実を図るものとし、各教科に属する科目、特別活動及び総合的な学習の時間それぞれの特質に応じて適切な指導を行わなければならない。」

「道德教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心をもち、個性豊かな文化の創造と民主的な社会及び国家の発展に努め、進んで平和的な国際社会に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道德性を養うことを目標とする。」

また、こうしたことを進めるにあたり、「特に 道德的実践力を高めるとともに、自律の精神や社会連帯の精神及び義務を果たし責任を重んずる態度を養うために指導が適切に行われるよう配慮しなければならない。」とされる。

②『中学校学習指導要領』（平成10年度版）⁽⁷⁾

第1章 総則 第1 教育課程編成の一般方針

「道德教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心をもち、個性豊かな文化の創造と民主的な社会及び国家の発展に努め、進んで平和的な国際社会に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道德性を養うことを目標とする。」（高等学校と共通）

これらを進めるにあたり「教師と生徒及び生徒相互の人間関係を深めるとともに、生徒が人間としての生き方についての自覚を深め、家庭や地域社会との連携を図りながら、ボランティア活動や自然体験活動などの豊かな体験を通して生徒の内面に根ざした道德性の育成が図られるよう配慮しなければならない。」

続いて「第1章道德」では以下のように記述されている。

第1 目標 「道德的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道德性を養う」

第2 内容 「1. 主として自分自身に関すること。2. 主として他の人とのかかわりに関すること。3. 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること。4. 主として

集団や社会との関わりに関すること。」

③『小学校学習指導要領』（平成10年版）⁽⁸⁾

小学校の場合、内容の具体的提示は中学校とは異なるが、目標・その他は同じである。

④『幼稚園教育要領』（平成10年版）⁽⁹⁾

幼稚園教育の目標：「幼児期における教育は、家庭との連携を図りながら、生涯にわたる人間形成の基礎を培うために大切なものであり、幼稚園は、幼稚園教育の基本に基づいて展開される幼稚園生活を通して、生きる力の基礎を育成するよう学校教育法第78条に規定する幼稚園教育の目標の達成に努めなければならない。(1)健康、安全で幸福な生活のための基本的な生活習慣・態度を育て、健全な心身の基礎を培うようにすること。(2)人への愛情や信頼感を育て、自立と協同の態度及び道徳性の芽生えを培うようにすること。(3)自然などの身近な事象への興味・関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにすること。(4)日常生活の中で言葉への興味・関心を育て、喜んで話したり、聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにすること。(5)多様な体験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにするようにすること。」

また、『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』（平成13年）⁽¹⁰⁾によれば、以下のような説明がある。

「・・・幼児期にふさわしい道徳性の芽生えは、幼児が、家庭や幼稚園で他の人々と共に生活し、他者とのやり取りを重ねていく中で培われていきます。・・・」

第1節 幼児期と道徳性「道徳性の発達のためには、特に、1)他者と調和的な関係を保ち、自分なりの目標をもって、人間らしくよりよく生きていこうとする気持ち、2)自他の欲求や感情、状況を受容的・共感的に理解する力、3)自分の欲求や行動を自分で調節しつつ、共によりよい未来をつくっていこうとする力が必要である。」

- 1 道徳性の基盤とその発達、(1)基本的な信頼関係と生活のリズム、(2)自他の分化と反抗期
- 2 幼児期の道徳性、(1)他律的な道徳性と自律的な道徳性、(2)幼児期の遊びと道徳性、(3)調和的な人間関係と外の世界を知的にとらえる力

さらに『事例集』では、「学校教育においては、幼稚園段階から高等学校段階まで、発達段階に応じて道徳教育が行われています。」とあるように、学校教育においては、共通に「道徳性の発達」を目指し、学校教育の入り口である幼稚園教育の道徳性の芽生えから、義務教育段階での道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性、出口である高等学校での特に道徳的実践力、自律・社会連帯の精神、義務・責任の態度などへと、発達段階をふまえて行われている。また、特別な時間（道徳の時間）を設定する小学校・中学校も含めて、学校教育全体の中で行うこととされている。やはり、具体的な生活の中で行うことが基本的に望ましいからである。また、教科内容に関しても道徳性の発達に関わるものもある。すなわち、人間の成長・発達の一部として道徳性を捉えるのではなく、道徳性は一人の人間のすべての側面の教育にも関わることだと考えられる必要がある。だから、人間としての生き方、在り方に関する教育なのである。それゆえ、その内容も、自分自身、他者、集団・社会、自然・崇高な物にかかわることになる。

また、次の記述も道徳教育を考える際に重要である。

「・・・道徳の発達に影響を与える中心的要因は、一般的には、2)の理解する力、つまり外の世界を知的にとらえる力であると考えられるが、1)の他者と調和的な関係を

保とうとする気持ちは乳幼児期から一貫して見られ、それは道徳の動機づけとして重要であり、道徳の発達を根本で支えているものである。したがって、発達の初期からある基本的な信頼関係を大切に、また、ゆがまないように配慮することが大切なこととなる。さらに、幼児期は、3)の自分の欲求や行動を自分で調整する力が増大する時期であるが、その増大は外の世界を知的かつ共感的にとらえる力の発達と関連している。⁽¹¹⁾

「理解する力、つまり外の世界を知的にとらえる力」が道徳の発達に影響を与える中心的要因なのである。その意味で、小学校以上の学校における教科は、道徳の発達の中心的要因ともなる。また、他者との関係づくりは道徳の動機づけでもあり、根本をささえるものである。

思いもよらない子どもたちの様々な問題が生じる現在、いかにして子どもの内面性を育てるかが課題になってきている。1746年から1827年に生きたペスタロッチは「下からの教育学者」⁽¹²⁾とも呼ばれるように、自分自身の日常的な生活から人間の生きゆく理想を追究し、心・頭・手の調和的な発達をめざした教育活動を行っていった。また、自らの理念を具体的に理解してもらうために『リーンハルトとゲルトルート』といった小説を書いている。社会的歴史的に制約をうけつつそれでも個々が異なる生き方をする人間、その知的な発達と心の発達および身体の発達の関係性をふまえた道徳教育の在り方について、ペスタロッチの著作から現在の教育に示唆することは何であるのかを探ってみる。

3. ペスタロッチにおける道徳教育

(1) ペスタロッチの道徳教育思想

ペスタロッチは「人類の発展における自然の歩みについてのわたしの探究」(以下、『探究』)⁽¹³⁾において、人間性の3つの状態という彼独自の思想を打ち出した。すなわち、「動物的状态」、「社会的状態」および「道徳的状态」である。これら三つの状態は、「個々の人間の内部における進歩の道すじとも解され」、それは「人間の幼児期、青年期および成人期の型に対応する。」そして、この三つは「子どもの真理、徒弟の真理および師匠の真理 Meisterwahrheit に対応する。」シュプランガーによれば、以上のようにペスタロッチはこの三つの状態を発達段階として示した。そのみでなく、動物的状态、そして次の段階である社会的状態の「二つの段階は現存していて互いに相争っている本質の二層を意味する」のであり、第三の状態である道徳的状态が加わるが、「この第三の状態もまた、あらわれてはまた危殆に陥るところの本質層にほかなら」ない。「これら三つの動因が人間自然のなかでいつも互いに相争うところに、まさに人間自然の解き難い問題性が存する」のであり、これら三つの状態が人間のなかに絶えずあるものとして示している。⁽¹⁴⁾人間性の三つの状態は道徳性の発達段階としてとらえることができるとともに、第三の道徳状態まで発達したとしても絶えず揺れ動き葛藤する現実的な人間像を描いているのである。

ペスタロッチにおいて興味深いのは、『探究』に書かれている「自然の作品としてのわたし」「人類の作品としてのわたし」「わたし自身の作品としてのわたし」という表現であり、「わたしはわたし自身の作品として、わたしの道徳的力を通して、わたしの本性がなす最高品位にまでわたしを高める。」自然、人類社会、その上での「わたし」という自立・自律的な状態こそが、極めて道徳的な状態とされる。また、「わたしは自ら世界

となる。そして世界はわたしによって世界となる。わたしは世界から離れぬものとして世界のつくったものであり、一世界はわたしから離れぬものとしてわたしのつくったものである」自己は環境により作られるのみではなく、自己により環境を作るのである。

その際、教育的働きかけをどのように行うかという、「道徳的存在としてのわたしはわたし自身の作品である」ので「道徳形成の諸力を人間の内面からとりだす」ことが必要である。しかし、健全な道徳的状况である環境で人間を形づくるのが否定されるのではなく、「形づくることと、とりだすこと、つまり覚醒することの二方向性は相互に結合してあらわれる。」⁽¹⁵⁾ のである。道徳教育において、適切な環境設定と自己活動を引き起こし内面からとりだすこと、そしてそれらの結合の在り方が、道徳的存在としての子どもの自分づくりにおいて重要となるのである。

では、環境教育学とも呼ばれているペスタロッチの前期的思想から学びうることは何なのであろうか。まず、その特徴をおさえてみる。

(2) 前期的な道徳教育思想の特徴

ここでいう「前期的」というのは、時期を前期と後期に大きく分けての「前期の」思想ということではない。主要には前期に支配的ではあっても、晩年に至るまで、絶えず一貫して存続している思想である。シュプランガーは、ペスタロッチの教育思想の発展を「前期的」と「後期＝近代的」という範疇でとらえ、生活圏理論から道徳自律思想への発展としてとらえている。⁽¹⁶⁾教育の目的としての人間観やそれに伴う教育技術に関しても発展してきている。すなわち、環境により規定され受動的に発達する人間観をもとに子どもが適切に発達出来るような親心のある環境設定の重要性を説く前期的な教育方法の理念から、徐々に自分自身で能動的に環境に働き掛け自己活動する主体を育てる教育方法へと発展している。だが、子どもの発達に適切な環境としての生活圏に注目した前期的な環境設定の考え方は、後期の考えである自己活動概念を中核におく道徳自律思想にも重要な位置を占めている。(本論文 2- (1) 参照)

前期的な考えでは、「人間性の3つの状態」でいえば、「動物的状態、社会的状態」までしか考えられていないといわれている。⁽¹⁷⁾しかも彼の社会的状態は必ずしも良い意味での社会性の発達を意味しない。法や集団規範がありそれに合わせている状態というような他律的な姿である。しかしここに、社会の中で生きていく場合の現実があるともいえよう。彼の時代において、それは産業資本の最初の導入や進展にもなって生じる農村での経済の問題であり、農民の貧困化の問題であり、そこでの農民道徳・教育の問題なのである。さらに、それは、もはや農民ではなくなった無産者の階層の問題でもある。このような社会の状態の中で、ペスタロッチの考え方は、貧困家庭の子どもたちの育ちを考える上で急務であった現実的なとらえ方なのではないかということである。

現在の日本においても同様な事はないであろうか。例えば、高等教育を受けても、そこで習得した専門的知識・技術を用いた仕事に就かない、就けないという現状がある。そこには、仕事をしたくない、或いは決定を先送りにする若者の問題や、専門を生かした就職の門が狭いことや、労働形態としてアルバイト・パート、派遣社員などが大きな割合を占めるようになったことなどの社会・経済での問題がある。また、リストラ問題もある。また、年収が低下しても、現在の仕事のために、また、さらなる知識・技能の習得のために、費用がかかり、使いすぎる事による人間の発達への影響が問われつつも、自動車、携帯電話やパソコンなどを使わざるをえない。仕事などで求められる技能が大きく変化してきてい

るのである。また、資格の問題もある。資格が必要な時代となり、自分の意志にかかわらず或いは必要性もなく、多くの資格をとる者もいる。しかし、その資格がその後の人生で身を助けることもある。また資格取得に向けて学んでいるうちに、その内容に目覚め、夢中となり自己の生き方を見つけるチャンスになることもある。このように、現在の社会で求められる事に自己を合わせていくことも、生きていくために必要なことである。

しかし、社会の流れに合わせてばかりで、人間としての生き方の真理や真実を求めようとせず目の前の問題に気付かず、落ちぶれていく人々もおり、そのような人々こそを、ペスタロッチは救いたいと思い、そのようにならないために子どもの教育を考えたのである。

それは、すなわち、自律的・道徳的な状態を意識しての、動物的状态から社会的な状態をめざす教育でなければならない。そこで、次に、このことを「動物的から人間的へ」というとらえ方⁽¹⁸⁾で考えていくことにする。また、ナトルプによれば、『隠者の夕暮』『リーンハルトとゲルトルート』などの「初期の手記で明確に認識されているように、ペスタロッチにとって自発性の原理は第一に人間における道徳的な力に相当し、『探究』においてそれは太陽の輝きのように明確になっている。」⁽¹⁹⁾したがって、自発性の原理と道徳的な力の関係性にも触れていく。

4. 前期的道德教育思想

(1) 動物から人間へ

以下、人間が動物的から人間的になることと、人間的になるための条件について、ペスタロッチの考え方を概略する。

彼にしたがえば、人間は生まれて、動物的な見方から人間的な見方へ、動物的な聞こえ方から人間的な聞こえ方へ、動物的な感じ方や楽しみ方・苦しみ方から人間的な感じ方や楽しみ方・苦しみ方へと変わっていくことが求められる。⁽²⁰⁾後期の書物である『人間陶冶に関する聴覚の意義』⁽²¹⁾では、以上のことを述べ、実物と言葉をいかに認識するかということに関して、幼い子どもへの母親からの影響の大きさと役割について記している。すなわち、生まれて最初に人に触れ、物に触れ、自然に触れていく中で、人間としてのとらえ方を母親をとおして身につけ、人間的な「直観」を育てることを重要視している。では、ペスタロッチはそのような直観をどのようにとらえているのであろうか。

ペスタロッチは、直観は事物を感覚的にとらえるのみではなく、「直観をもって感性と悟性とを統一」するものとして捉えていた。「認識作用の諸段階のなかで最も無自覚的に取り扱われていた直観を概念的に内化し、深化した。」すなわち最も単純な直観であっても、それは単なる感性の所産ではなくて、既に「自分自身の作為」でなくてはならない。「ペスタロッチの直観はその基礎を内的自我にもっているのである。」⁽²²⁾

感覚的・動物的なとらえ方とは、自己中心的な感じ方、考え方、行動の仕方であり、自分の欲求・要求を通すのみというとらえ方である。確かに、人間の子どもの生まれたばかりの状態にあって、自分の身体・心の心地良い状態を求めるのみである。しかし、生まれてからまもなく、生まれた環境のなかでさまざまなものに出会っていく。そこで徐々に頭で考える事も質・量ともに増加する。もちろん、頭で考えることは、身体や心とも結びついて発達する。そこでの出会い方（自分の認識の仕方や関わり方の程度など）で同じ対象はいかなる姿にも変わる。例えば、小さな虫は幼い子どもにとっては、動く不思議なものであり、自分と同じ命あるものとしてとらえられない。動くおもしろい物として、手でた

たいたり、つぶしてしまったり、その結果不必要に命を奪ってしまうことになる。動いている、たたくととまるという変化がおもしろい。それに惹かれてたたく。しかし、生きているものが命を失うと、もとのように動くことはできない。修理して動かすことはできない。テレビゲームのようにリセットも出来ない。幼い子どもに、いかに人間としての最初の感覚をつくるのかは、まわりにいる先に生まれた人間からの子どもへの伝え方による。自分と対象の同じ部分や異なる部分をどのように認識するかで、対象へのかかわり方は大きく異なる。例えば、5才くらいの子どもの、何匹かの虫がいると一番大きいのは、おとうさんと、次に大きいのはおかあさん、小さいのは子どもたちと、自分の身の回りにいる家族になぞらえたりし、そのまとまりが壊れないように気遣ったりする子もいる。その後、少しずつ人間と虫の違いを認識していく。しかし、同じ年齢でまだたたいてつぶす者もいる。おとなになってもおもしろがってあるいはむしゃくしゃして虫のみならず鳥や猫を遊び半分に痛めつけたり不用意に殺す者もいる。こうなると、もはや生き物への人間的なとらえ方をさせることは困難かもしれない。確かに、なるべく早い段階で、人間としての内的自我を基礎にした、感性と悟性が統一した直観を養う事が大切である。そこで、口述するように、子どもの誕生直後から、その子の側にいるであろう母親の存在が、人的環境として大きな役割があるとペスタロッチは強調する。

さて、感性と悟性に関わる内容に関して、ペスタロッチは『隠者の夕暮』のなかで、心と頭が関わる認識を「真理に対する感覚」という言葉を用いて説明している。「人間の智慧はすべて善良にして真理に素直な心情の力に基づき、人間の浄福はすべて単純と無邪気とのこの感覚に基づいている。」⁽²³⁾人間としての幸せにつながる知恵を求めて真理を探究するには、知的な力が必要なのは当然であるが、それのみでなく善良で真理に素直な心の力が必要なのである。この善良で真理に素直な「真理に対する感覚」である徳、その「徳を持って真理の認識を基礎づけようとする知徳一体感」⁽²⁴⁾を、ペスタロッチは強調する。科学的真理探究のみでなく、そこに人間としての倫理感を持ち真理探究することにより、真の人間としての幸福を求めることができるのである。現在の日本では、学校での成績は良いが、生命を大切に出来ない子どもの問題が生じてきている。自分や他者の幸福につながる知恵としての学びを、「真理に対する感覚」と結びつけて考えていかなければならない。ペスタロッチのいう「単純と無邪気」な物事への構えを持ち、素直に真理を求めようとする感覚を育てることも人間的な育ちに重要なのである。

以上のように、真理探究に向けて感性と悟性が必要であり、そのために感性と悟性が統一した直観を養う教育活動がなされねばならない。こうしたことは母親のみの問題ではなく、教育活動のある場ではどこでも重視されねばならないことである。

(2) 母親の役割

ペスタロッチにおいて、道徳性の発達の基本ともなる、人間が「人間になる」ことの原点において、母親の存在は大きい。さらに、これまで述べてきた動物的から人間的への直観を育てるために、母親は子どもと世界との間を繋ぐ仲介者としての大きな役割をもつ。例えば、子どもが生まれて最初に重要な人間性の表現として、まなざしの重要性を説く彼は、次のように述べている。「まなざし（微笑み）を共有して向かい合うことが、子どもが人間として育つ第一歩である。ペスタロッチは次のように述べている。幼児の目が母の目と互いにまじわる日・・・その愛に満ちたまなざしが、幼児の唇のあたりに漂う最初の微笑みをよびおこす日がやってくる・・・この事実とともに幼児の生涯の生産における一

つの新しい時代が始まる。」⁽²⁵⁾ このまなざしの共有が、人間という対象にむけての人間的な最初の直観にもなるのだが、このように子どもが人間として育つことにおける母親の役割は過大である。

『隠者の夕暮』においても、ペスタロッチの考える家庭は非常に家父長的である。母親と父親の役割は、簡単に言えば、次のようである。

「満足している乳呑子はこの道において母が彼にとって何であるかを知る。しかも母は幼児が義務とか感謝という音声も出せないうちに、感謝の本質である愛を乳呑子の心に形作る。そして父親の与えるパンを食べ、父親と共に囲炉裏で身を暖める息子は、この自然の道で子どもとしての義務のうちに彼の生涯の浄福を見つける。」⁽²⁶⁾

子どもが生まれた家庭において、父親が外で働きその賃金で家族が食べる物等を得る役割であり、母親は調理などの家事と子育てを行う役割であるという考え方である。だから、子育ての係であり、子どもの側にいつもいる母親の役割はとても大きい。現在の日本では、一般化して話すことは難しいが、現実にはそのような役割分担の家庭は多い。また、母親は子どもを10ヶ月間も自らのからだに孕み、生まれてしばらく数時間毎に要求する母乳を飲ませるといった役割は、確かに子どもへの最初の人的環境としての重要な意味があるであろう。授乳、おむつ替えなどの行き届き方や、その度に愛しみの微笑みをもって自分を見、言葉かけをしてくれるか否かで大きく異なる可能性は否定できない。このように発達初期の段階では動物から人間に向けての働きかけの多くを母親が行うこととなる。確かに、その時期に子どもに最初の印象をどのように作り、概念を成立させるかが、子どもと環境世界を繋ぐ役割をもつ母親の仕事となることは、否めない。

また、ペスタロッチが子どもへの母親の役割を強調するのは、幼い頃父親を失い、自身のまわりに聡明な母としての役割をこなす自分の母親や乳母や妻などが存在していたことが影響していると言われている。⁽²⁷⁾

「ペスタロッチは母なる居間を小さな子どもにとって自然な環境としてみている。彼は居間の力について訓育や陶冶にとって最初の段階として意識されなければならないと述べた。そこでの教育は母親に高い課題と大きな注意が当然与えられる。『リーンハルトとゲルトルート』では、ゲルトルートは模範的な母、国民の妻であり、子どもたちに確固たる生活秩序の形成を助け、仕事や生き生きとした直観や教訓の形成を助け有能な人間へと教育する。」⁽²⁸⁾ 『リーンハルトとゲルトルート』⁽²⁹⁾でゲルトルートは7人の子どもの母親であるが、子どもの教育がとても評判が良いので家庭教育の状況をみるために、城主と執事・牧師が家を訪ねる場面に、彼女の教育の姿が描かれている。三人は早朝訪問すると家族は朝食後であったが、片づけの皿洗いをまじめに手伝う子どもたちの姿をみる。子どもたちはその後皆で賛美歌を歌い、糸取車につき仕事を始める。ゲルトルートは聖書の一節を読むと、子どもたちは糸を繰りながらその一節を繰り返す。教訓的な章句は暗唱するまで復唱する。長女も他の部屋で家事をしつつ章句を繰り返している。その後長女は、畑に行き昼食用の野菜を取ってきて、他の子どもたちと一緒に野菜を洗う。言葉の教え方は学校のように「これはあなたの頭です。これは手です。これは指です。」という教え方ではなく、できるだけ生活に即して言葉を生かして教えた。「ここにいらっしやい。手を洗いましょう。手を洗ってあげましょう。爪を切りなさい。爪を切ってあげましょう。」など、子どもたちは生活の中での言葉をしっかりと身につけていた。しかも、それが、子どもの年齢や発達の程度に応じてなされた。算数の基礎教育も生活に即して行われた。5枚2列のガラス

が入った窓も10進法の勉強に利用され、糸を巻く紡ぎ車の回転数を数えさせた。このように子どもたちの生活のあらゆる機会を捉えて、日常の事柄や自然の力を観察するように指導が行われた。そして、子どもたちは自分の覚えたことを、年下のきょうだいに教えることが出来るほどであった。

ゲルトルートの子どもたちは外で自由に飛び跳ねて遊んでいても、注意深く道の汚物を避け、荊棘を避け、着物にもよく注意をした。靴ひもがほどけると、すぐに結び直した。自分を守り、衣服を守り、怪我をしないような条件をわかりつつ、身のこなしも敏感に反応しなければできないことである。

また、次のような場面がある。パンがなくて困っている人たちのことを思いやるように、どんなつまらない物でも必要以上持っていたら困っている人に分けてあげるように話し、実行させた。さらに、ゲルトルートは母を失った不幸な隣家の子どもにも糸繰りを教え、しつけについても世話を焼いた。

「学校教師が隣人愛について話している時に、病気で貧しい隣人に確かな援助を体験し、そのような援助が効果あることを見て、満足を感じたりなどできる。」そして、ゲルトルートは「子どもたちの人格形成のために、そのような必要な援助することを活用した。」「このような根本思想、すなわち、自分自身で体験して学び、自分の見解から行動を通して認識することを子どもの教育に要求していたのだ。」⁽³⁰⁾ このように、言葉で教えるだけではなく、体験を通して実際の出来事から心と頭を動かし認識することの必要性をペスタロッチは強調している。そのことは、もちろん体験させればよいという意味でもない。このことは、母親のみでなく、教育活動すべてにおいて考えねばならないことである。

実物、実体験を子どもの心情や知的活動に統一的に関わらせて、直観を育てたり概念を形成したりして教育活動を行うことは、母親のみでなく教師にも必要である。

(3) 労働するからだ

ゲルトルートの子育てで述べたように、子どもたちは日常的に仕事をしている。それは、食事の準備・後かたづけ、掃除、きょうだいの世話など生活に関わることと、将来のために手に技をつけることあるいは現在の家庭のために仕事を手伝う姿が見られる。

『リーन्हルトとゲルトルート』の主題は、当時の農村近代化のなかで必然的に生じてくる経済的および道徳的な「時代の問題」であった。商品生産の発展は、ますます多くの労働力を必要とする。そのため農村にも家内工業が進入してきたが、それが人々に対して作りだした経済的・社会的な状況は次のようである。「封建的な土地所有制の崩壊と貨幣経済の発展は、『無産者』の大衆、つまり生産手段をもはや所有しない『貧民』大衆を作りだしてきた。しかもかれらが新しい生産に従事するには、それに必要な手工業の熟練をもたず、新しい労働者（大工場制生産のもとでの純粋な賃金労働者でないにしても）に要求される労働への勤勉さや従順さもいまだにもち合わせていなかった。」⁽³¹⁾そこで、ペスタロッチは、そのための技術と労働への勤勉さ・従順さを子どもたちに身につけさせることが、子どもの将来の生き方に関わる緊急の教育課題と考えた。さらに、農村に入り込んだ貨幣経済は民衆の状態を墮落させ、生計の性質を変えてしまうという問題があった。民衆は合理的に節約するなど計画し行動する力や、そのために必要な計算をする力もなく、「資本主義のもとでの生活様式の訓練をなんら受けていなかったのである。」⁽³²⁾例えば、リーन्हルトは「善良な、しかし、まことに弱い」人間として描かれる。当時の農村にみられる人間の典型であり、金銭経済のもとで要求される「節約・貯蓄」を知らないリー

ハルトをその妻ゲルトルートが子ども、家庭のために立ち直らせる意味がここにある。

ゲルトルートは、次の課題を小説の中で作者ペスタロッチから与えられ果たしていたのである。すなわち、「(1) どんなに貧しい家庭の子どもも計算ができ、ものごとを的確にとらえ、言語の表現ができるようにならなければならない。得た賃金を有効に使うなど、多少なりとも合理的思考態度が開発されていなければならない。(2) 工業の収益を得させるために、手の教育が必須である。」⁽³³⁾子どもたちが労働する技を持つ身体をもち、貨幣を生活の中で適切に使い、節約をしつつ蓄えていくことが苦痛でない人間を育てること、そのためには、将来を予測し計画し、計算する力や言語能力などの知力のみでなく意志力なども必要である。すなわち、人間としての生き方・在り方を考える道徳性の発達において、将来の仕事に関わる力を労働する身体として身につけること、さらにそのためには知と心の発達が関わっていることが求められるのである。

(4) 「居間」の教育学

ペスタロッチは『リーンハルトとゲルトルート』の1部を書いた後、庶民の啓蒙を目的にもっと分かりやすく読みやすい本として『クリストフとエルゼ』⁽³⁴⁾を著した。

長田新によれば、ペスタロッチは『クリストフとエルゼ』の中で「居間の哲学(Philosophie der Wohnstube)」ないし「居間の教育学」(Wohnstubenpädagogik) とでも呼べるべき彼の思想を下僕、ヨーストをして語らせている。」以下、同書におけるヨーストの言葉をもとに考察してみる。(なお、引用は、長田新編、『ペスタロッチ全集 第4巻』p.170~275.)

まず、「居間」は「小さな天国」・「家庭の天国」である。「子供たちを生涯のいたるところに必要な秩序と思慮深さを導くのに、居間よりもっと適当なところがあるだろうか。・・・大概の人の狭苦しい部屋を地上の天国に変える」。このような居間の秩序は、家族が生活をしていくのに必要な生活リズムであったり、整理整頓であったり、物事の順序であったりする。そうした秩序のある生活をする中で「学んだり仕事をしたりすると両親がとっても喜ぶ。このことを子供たちの身にしみこませる」。人間は昔から秩序のなかに生きてきたのであり、「一日のほとんど全体の時間を割り振って、秩序に即して居間で自分を育てていったんだ。」人間は居間で自分を育ててきたのであり、共に暮らしつつ子どももそこで学び仕事をし、子どももまた自分を育てていくのである。

「小さな天国」・「家庭の天国」である居間は、身体や心の居場所としての安心感を持たせる役割もある。「人間という奴は、自分の心のためにいつでもそれを暖めてくれる暖炉のようなものが必要なんです。その役割を果たすのが居間なんだ。人は居間で元気を回復し、爽快な気分になり、心を暖められ、平和な気持ちにならなければいけないです。」

そのような自分の心を暖めてくれる場である居間は愛情があり、だからこそ子どもをしつけることが可能となる。「一切に対して人間は何らかの仕方で居間でしつけられるんだ。人間の愛情すらあわただしい生活の荒々しい土壌のうえでは芽を出しませんよ。それは庭で育てられる美しい植物が苗床での面倒や世話を必要とするように、居間における面倒や世話を必要」とする。「親が子供の過ちを指摘し、そうした悪習を退けようとしたとき、しかも子供の方が即座に、「ぼくは愛されているんだ」と心温まる気持ちで確信し感動したとしたら、これこそ優れた教育のなかでの珠玉なんです。」

このように子どもを育てるのに必要なのは、その子に愛情があり秩序がある居間であり、その居間で「実直」で「敬虔」で「正しい人」である親がいることである。その条件があれば、子どもは次のように行動する。ヨーストの言葉でいえば、「人間はたんに犬や猫の

ように殴られる恐怖から秩序を守るばかりじゃあなく、むしろずっとよく、自分の自由意志で正しく行動できるってこと。つまり感謝と愛とによって、また自分の見解と独自の判断とによって正しく行動できるってことですね。」ここで「道徳的状態」ともいえる「自分の自由意志」や「自分の見解と独自の判断」により「正しく行動できる」自律的な子どもの姿が描かれ、そのような子どもを育てるための環境が示されている。

教育を行う場合大切なことは、おとなが「まず自から正しく実直に生活すること」であり、その姿をみせるような「自分のよく知っていて、愛し、好んでやっている事がらなら、子供やすやす教えられる」。そしてそんなことを教えようとするとき、「人は普通実に念入りに、辛抱強く、深い愛情を傾ける」。しかし、「ところがいけない、善良な心とか正しい行為とかいう段になると、辛抱強いとか時間をかけるとかいうことは、もうどこかにすつとんでしまう」。「つまり乱暴な言葉と鞭とでそれらを無理強いする」。道徳的な内容を子どもが身につけるには、大人が言葉で説明するだけでなく普段から自分の姿で見せておくことである。子どもが模倣すべき例が身近になれば、道徳的心情や実践力を養う事は難しい。子どもは「人に親切にきなさい」「思いやりを持ちなさい」と言われても、自分が親切にされたり、思いやられたりして、嬉しいという経験がないとわからない。また、他者が親切にしている、されていることをみる経験も必要であろう。人間には他者共感能力があるが、複雑な状況の読みとりは或る程度の経験なしでは困難である。子どもが模倣すべきモデルが体験として存在し、言葉と結びつくことを通して、そのモデルは子どもの中に組み込まれていくのである。

「子供に勉強させたり仕事をさせたりするためには、二つの動因・二つの歯車があってこれを思い通りに動かしたり回転させたりできる・・・つまり、子供は或る教訓の利益を自分の目で確かめ、それを望むようになるか、両親が子供を愛し抜いて、子供が心の底から喜んで勉強をし、仕事をし、両親を喜ばせるようにし向けられるかのいずれか。」すなわち、勉強・仕事の動機は、自分の将来を的確に見て自分自身のためや愛する者のためであり、ここに極めて道徳性に関わる動機による自発的な活動の姿がみえる。

長田新は次のように述べる。「『居間』は人間の陶冶にとって、最も本来的なもので、しかも最も自然の道に即したものであるというのが、ペスタロッチーの深い確信だ・・・彼のこの確信によれば、陶冶の過程は子供の全体を包括しなくてはならない。人間の諸力はすべて、調和と秩序とのうちで、均衡を保って発展するように配慮されなくてはならない。・・・全諸力を調和的に発展させることによって人間を満足と安らぎとに導かなくてはならない。そしてそのことを可能にする条件を有するものは、『居間』においてほかにない。というのは『居間』の仕事の対象は、子供たちに、彼らの頭と心臓と手とを互いに調和的に働かせることを要求するからである。」この書物が書かれた18世紀末のスイスでは、幸福な居間が、社会・産業の変化により奪われていった時代である。この状況は、20世紀半ば以降の日本の姿に似ている。ペスタロッチーは荒れていく人々を見るにつけ、幸福な居間を家庭に返そうと懸命であった。彼は述べている。「幼いころ秩序を教えられなかった者は、平静な心と健康と生命とを犠牲にしてしまう。・・・こういう不幸を防ぐ最上の手段はすぐれた居間であって、こここそ人間が必要とするもろもろの事がらを訓練するにまさにふさわしい場所だ。」子育てにおける親・家庭の見直しや在り方が叫ばれている21世紀の日本での課題と同じなのである。

一般の人間陶冶の理論が、真に具体的現実に実現されるのは、この「居間」において

ほかにはない。しかもここでペスタロッチは特に人間の道徳力の発展を考えている。長田新が解説で述べているように「ペスタロッチー教育学の最高目標は、人間諸力を調和的な、そして道徳的に独立の人格にまで陶冶するにあったといつてよい」であろう。

(5) 「生活圏の理論」

前期的思想には、居間を拡げた形での、学校観、国家観がある。すなわち、居間の親心と子心の関係が、教師と子どもの関係、国家と国民との関係の基本であることが望ましいとされる。シュプランガーは、『隠者の夕暮』中心に、ペスタロッチの生活圏が簡単な5つの同心円により描かれることを示している。内的な圏は内部から順に神・内部感情の二つの円で成り立ち、外的な生活圏はそれを取り巻き順に「①家庭（居間）②職業（労働の場所）③国家と国民」で成り立っている。すべての生活圏は相互に内的に解け合っており、内的に通じ合っている。⁽³⁵⁾ペスタロッチにおける人間教育の特徴は、子どもの内的な圏の重視、内的な圏と外的な生活圏との結合、暖かい愛の重視にある。そして、この同心円的生活圏の思想形式は、『リーन्हルトとゲルトルート』に生かされている。同心円的生活圏は子どもにとって、家庭、学校、社会である。

以上のことから、子ども道徳性の発達を考えた場合、人間性の象徴としての「愛」が重要であることがわかる。家庭の中で親心としての「愛」により、子どもに子心としての「愛」を育てていく。この子どもの中に育った「愛」は、学校でも教師が親心を持って子どもに関わることにより、教師への子心も持つ生徒となる。いわば、信頼関係の成立である。

また、「愛」を持って育てられることで、自分自身を愛し大切に自己肯定感が育ち、また、他者との関わりにおいて他者を大切に愛そうとするところから始まる。子ども同士が互いに信頼関係を持とうとするであろう。親心のある教師のもとで、子心を持った子どもたちがきょうだいのように互いに関わるということは、学校が一つの家庭となることである。このことが、社会においても同様となる。自分自身を大切に育てることと、自分と他者・集団・社会などによりよい関係性をもっていくことが、現在の学校教育の考え方に通じる。内部の圏と外部の圏をどのように関わらせて、内面を育てるかは、母親や居間での教育の在り方が参考になる。『リーन्हルトとゲルトルート』三部での学校の姿は、まさにゲルトルートの家を模した学校である。

ここで、ナトルプの共同体の視点はペスタロッチのいう学校をより具体的現実的に現在の学校に結びつける。ナトルプによれば、「孤立的に考察された人間個人は、ただ一般的に抽象のうちに存在しているだけで、実に個人は人間として人間の共同体から全く分離されないのである。とくに、道徳力が人間における中心的な力であり、それがそのように人間に共同体を直接考慮させざるを得ないのである」と人間の道徳力と共同体の関係を述べ、ペスタロッチの教育学は「原理的に共同体の教育に合致」と述べている。すなわち、ペスタロッチは『自然権』を『共通意志』の理念－「多数の者が本当に望み、また共同体の存続を考えることを意味しなければならないし、すべての者に同じ意志が不可欠であり、またそのように意識されなければならない」理念－に基礎づけ、このような根本信念を『隠者の夕暮』と『リーन्हルトとゲルトルート』なかでペスタロッチは追究し、まず、「人間的な共同体の原型は、家であり、家族である」ことをつきとめた。家・家族は、道徳的関係で結ばれ、「道徳的関係の基本形式が一般的」である。この家庭の道徳的関係を学校という共同体においても作ることが求められる。さらに、「人間（その本性・本質）」と「環境」という二つの要素の関係性の問題である。二つの要素は「相互に人間を一定の

正しい関係にもたらず」のであり、「環境は人間を規定するが、しかし人間が抵抗できず屈服してしまうような疎遠な外的な力ではなく、むしろ人間の手のうちに横たわっている」のである。⁽³⁶⁾家庭や学校は、子どもが人間として育つための適切な環境でなければならないが、それらはまた構成員により創られるものである。家庭・学校を、子どもたちが自分自身が育つ場として共に協力し創るという考え方が、子どもたちの自律性を育てることとなる。また、よりよい環境を創ることのみがおとなの仕事ではなく、共同体の仲間として今の環境を子どもと共に創っていくことも重要な事である。

5. 意義と課題

(1) ペスタロッチの時代は農業から家内制手工業への移行期であった。家内労働（主として織物生産）に従事する多数の大人や子どもを訓練することが、緊急の課題であった。（吉本 p 49）これからの社会で生きていくための労働内容を、教育内容に取り入れ自分の生き方と絡めつつ指導していくことが求められる。現在の日本で訓練すべきことは、コンピューターであろう。コンピューターと糸取車は同じであろうか。糸取車は実物の糸を手で触れるが、コンピューターは対象は手に取って触れることが出来ない物である。実物に触れずに育ってきた子どもたちの問題や、仮想世界に長時間関わりすぎた子どもたちの問題も出てきている。学校教育で、人間として育つための教育内容を社会の変化に合わせつつ選び取る困難さは、もはやペスタロッチの時代とはかけはなれている。しかし、個々の人間としての生き方、在り方を育てる道徳教育の中で、実物に触れ生活に関する実体験をしつつ頭と心とからだの調和的発達をはかる教育の視点は見落としてはならない。

(2) 現在の日本では、家父長的家族形態は選択の一つでしかない。家制度の崩壊や産業の変化や人権や自由・平等の尊重などにより様々な形態の家族がある。しかし、子どもが健全に育つのは形態ではなく機能の問題である。現在、子育て機能が不十分な家庭が多く、子どもが育つ家庭にするために様々な子育て支援が施策されている。そのときに、保護者などにより小さな子どもによりよい最初の直観を身につけるような援助を意識的に取り入れていく必要があるであろう。また、子どもが自分自身に肯定感を持てるような心が落ち着く居場所としての家庭作りや、モデルのある生活リズム・食事など秩序のある家庭作りは緊急の課題である。就学前期の人間として子どもの育ちが保障され、自分や他者・社会・自然などの関わりの基礎があつてこそ、学校での道徳教育の機能がより生きるのである。

(3) 学校は、様々な家庭から通う子どもが共に生きる場所である。現実の子どもたちは、ペスタロッチが考えたような家庭から皆来るわけではない。様々な価値観（対立もある）のなかで、個々が人間的に育つことや共に育つことを保障しなければならない。道徳性を育てるには、教師が生徒に教育愛を持ち、子どもが学校に来ている意味を人間教育の観点で問い直し、共に生きる場としての学校を協力して創造しようとするのである。それは、共生の場として学校を捉えることになるであろう。その過程でこそ、子どもの道徳的心情や思考などの内面を育て、その過程でこそ道徳的判断力や実践力は育てられるであろう。

(4) ペスタロッチが「人は古い琴の音で寝つき新しい歌で呼び醒される」（『クリストフとエルゼ』）と表現しているように、人間として必要な日常的な力を身につけ安心して生活する力と、社会や自然などの環境の変化に対応し、自分にとって新しいもの・人に呼び醒まされる力、それも自分にとって現在・未来に必要なことを直観し自己を呼び醒ます力を

育てる事がこれからの道徳教育の中で必要となるであろう。

注

- (1) 本田は次のように指摘する。子どもの人口動態グラフの極端な増減は、「単に、大人世代の老後に問題を生み出しているだけではない。子どもたち自身にとっても、それは、避けがたく厄介な問題を発生させていて、彼らと、彼らとのかかわりの深い大人たちを困惑させているのではないか。何しろ、ベビーブームの名の下、膨張の極みに達した子ども集団がざわざわと通り過ぎたその直後に、急激に規模の小さくなった子ども集団が粛々と通って移行としているのだから……。しかも、大騒ぎする子どもらの群れに代わって、過剰なまでに彼らを取り巻き始めた情報のネットに囲まれながら……。以下略」本田和子『変貌する子ども世界 子どもパワーの光と影』、中公新書、1999年。
- (2) 足立己幸、NHK「子どもたちの食卓」プロジェクト、『知っていますか 子どもたちの食卓』日本放送出版協会、平成12年。昭和56年の「子どもたちの食生態調査」では子どもの「孤食」など食生活での問題点や健康上の問題点の深刻さや悪循環の実態、さらに食生活における人間関係や家庭関係の変化が明らかにされた。平成11年での調査で問題はさらに広がり、子ども自身が「孤食」「個食」を求める姿もみられた。
- (3) 国連児童基金（ユニセフ）による先進国に住む子どもたちの「幸福度」に関する調査報告書（平成19年2月発表）では、OECD加盟国25カ国のうち日本の15才の子どもにおいて、「孤独を感じる」「自分が気まずく感じる」がトップである。また、本田の前掲書『変貌する子ども世界』p.217. に次の文章がある。「生きていくためには、よくも悪くもそれらに自分なりに立ち向かい、修羅の戦場を戦い抜かねばならない。しかし、『子ども』たちのなかに、それぞれに戦い抜かねばならぬこの戦場で、暴発という自爆行為で戦線を離脱する者たちが目立ち始めているとは……。」自傷行為、拒食症、ひきこもりなど若者の問題は多い。例えば平成18年に自殺した人のうち生徒・学生が886人（前年比25人増）と、統計を取り始めた昭和53年以降最多を記録したことが警察庁のまとめでわかった。（平成19年6月7日付「朝日新聞」）
- (4) ペスタロッチ、梅根悟訳『政治と教育』、明治図書、昭和40年。p.25.
- (5) 文部科学省『高等学校学習指導要領』、平成11年（平成16年改訂版）。
- (6) 同上
- (7) 文部科学省『中学校学習指導要領』、平成10年（平成16年改訂版）。
- (8) 文部科学省『小学校学習指導要領』、平成10年（平成16年改訂版）。
- (9) 文部省『幼稚園教育要領』、平成10年。
- (10) 文部科学省『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』、ひかりのくに株式会社、平成13年。
- (11) 同上
- (12) 長田新「解説」、長田新編『ペスタロッチー全集第4巻』、平凡社、昭和49年。p.5.
- (13) ペスタロッチ、虎竹正之訳「探究」、長田新編『ペスタロッチー全集第6巻』平凡社、昭和49年。
- (14) エドワルト・シュブランガー「ペスタロッチの『探究』—その分析—」、『ペスタロッチ全集第6巻 探究』玉川大学出版 昭和46年。p249. なお、山崎英則編著『シュブランガー教育学へのいざない』、近代文芸社、平成8年。p.181~183も参考にした。

- (15) シュプランガー、吉本均訳『教育の思考形式』、明治図書、昭和37年。p. 47-48.
- (16) 吉本均『学校教授学の成立』、明治図書、昭和61年。p. 62-63.
- (17) シュプランガー「ペスタロッチの『探求』、前掲書、p. 233-241.
- (18) Otto Boldemann : "Die Bedeutung von Johann Heinrich Pestalozzi für die Vorschulerziehung", Beiträge zur Geschichte der Vorshulerziehung . Volk und Wissen. 1978 .s.110-111.
- (19) ナトルプ、乙訓稔訳『ペスタロッチーその生涯と理念』、東信堂、平成12年。p. 64.
また、次のようにも書かれている。「自発性の原理は、『リーンハルトとゲルトルート』においては幾分か背後に留まっている。」(同書、p. 62.)
- (20) Ebenda. s. 111.
- (21) ペスタロッチ、吉本均訳「人間陶冶に関する聴覚の意義」、『ペスタロッチー全集 10巻』、平凡社、昭和49年.
- (22) 上野ひろみ「応答関係における子どもの自立過程」、吉本均編『人間を「人間にする」授業』、明治図書、昭和59年。p. 141.
- (23) ペスタロッチ、長田新訳『隠者の夕暮』、岩波書店、平成16年。p. 16.
- (24) 同上、p. 104.
- (25) 吉本均『授業成立入門』、明治図書、昭和60年。p. 26.
- (26) ペスタロッチ、長田新訳『隠者の夕暮』前掲書、p. 9.
- (27) ペスタロッチ著『リーンハルトとゲルトルート』長田新編『ペスタロッチー全集 第2巻』平凡社、昭和34年。p6.
- (28) Ebenda. s. 108.
- (29) 『リーンハルトとゲルトルート』に関しては平凡社版『全集 第2巻』で1部・2部を、平凡社版『全集 第3巻』(昭和34年)で、3部・4部を、さらに、玉川大学版の田尾一訳(『ペスタロッチ全集 第4巻』玉川大学、昭和47年)も用いた。
- (30) Ebenda. s. 110.
- (31) 吉本『学校教授学の成立』、p. 54. なお、この部分に関してはp. 47-62に詳しく述べられている。
- (32) 同上、p. 54.
- (33) 林正登『教室に生きる教育思想史—教育史学から現場への提言—』、北大路書房、昭和62年。p. 64.
- (34) 長田新編『ペスタロッチー全集 第4巻』、平凡社、昭和49年。この節における引用はp. 170-275. からである。
- (35) 山崎編著『シュプランガー教育学へのいざない』、前掲書、p. 155.、p181-182. およびシュプランガー『教育の思考形式』、前掲書、p. 22-32.
- (36) ナトルプ『ペスタロッチーその生涯と理念』、前掲書、p. 102-109.